

岡崎市議会議長 様

支出番号	
------	--

会派名                    チャレンジ岡崎  
代表者名                 杉山 智騎

下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

## 政 務 活 動 報 告 書

令和 5年 3月 29日提出

活動年月日	令和 5年 4月 24日（月）～令和 5年 4月 26日（水）	
氏名	近藤 敏浩	
用務先 及び 内 容	1	用務先    山口県山口市
	4月24日	内 容 市民工房「ファブラボ」を活用したプログラミング教育について
	2	用務先    福岡県那珂川市
	4月25日	内 容 五ヶ山クロス（モンベル五ヶ山ベースキャンプ）について
	3	用務先    熊本県益城町
	4月26日	内 容 益城町復興まちづくりセンターについて
	4	用務先
		内 容
備 考		

# 令和5年度 行政視察報告書

令和6年3月29日

チャレンジ岡崎 杉山 智騎

近藤 敏浩

青山 晃子

## 1. 視察日程

令和5年4月24日～4月26日

## 2. 視察先及び視察内容

(1) 山口県山口市

市民工房「ファブラボ」を活用したプログラミング教育について

(2) 福岡県那珂川市

五ヶ山クロス（モンベル五ヶ山ベースキャンプ）について

(3) 熊本県益城町

益城町復興まちづくりセンターについて

## 3. 視察内容 および 所感・市への提言

### ■視察先：山口県山口市

4月24日（月） 13:30～

～市民工房「ファブラボ」を活用した

プログラミング教育について～

### ○内容

・ファブラボとは？

『誰もが使えるオープンな市民制作工房』

FAB RICATION：製造×FAB ULOUS：すばらしい

【ファブラボ山口にて】

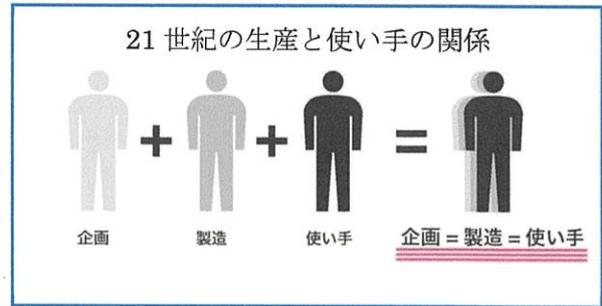


### ・ファブラボの起源

マサチューセッツ工科大学（MIT）Neil Gershenfeld 教授らにより 2002 年、ボストンのスラム街に世界初のファブラボを設置。2011 年、FabLab Kamakura（神奈川県鎌倉市）と FabLab Tsukuba（茨城県つくば市）が日本初のファブラボとしてオープン。

・世界 60 か国、1,000 箇所以上に拡大  
日本国内は 20 か所弱

・ 20 世紀と 21 世紀の生産と使い手の関係



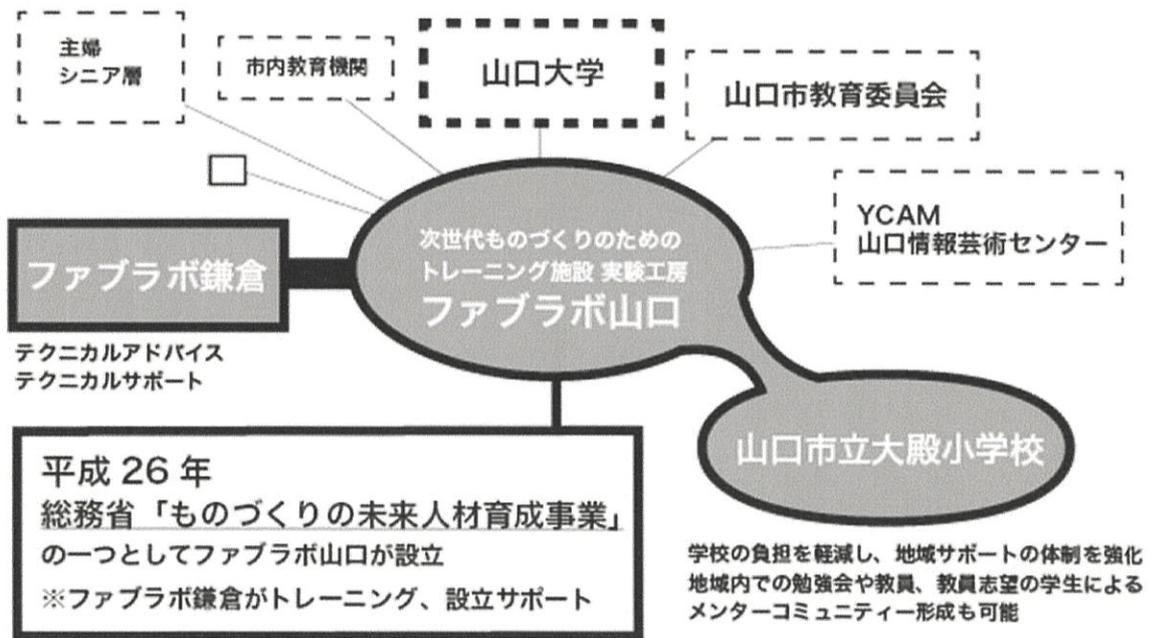
※企画・製造が使い手となることで、「自分たちで作ることができる」ことを知る



PROSUMERS (PRODUCERS+CONSUMERS) プロシューマー (生産消費者)

○若年層に対するプログラミングの普及推進事業

・平成 26 年 総務省「ものづくりのミライ人材育成事業」の一つとしてファブラボ山口が設立。日本初のファブラボ“FabLab Kamakura”がトレーニングや設立サポートを行った。“FabLab Kamakura”は小学校との交流があまりなく、当事業への当時の参画は難しかった。



【参照】ファブラボを活用した多世代地域連携型プログラム人材育成モデル (総務省)

・ 実施プログラム内容

「FAB WALKER プログラミングで生命を吹き込もう！」

・ 概要

◇ファブラボの機材を利用して、オリジナルの教材を自作

◇プログラミング教育や学びの環境デザイン・ファシリテーションなどに興味のある  
大学生・大学院生を対象にメンターを公募

(学年・教員免許の有無、校種、プログラミング経験の有無は問わない)

◇ファブラボを拠点として、メンター育成とトレーニングプログラムを実施

◇大学生がカリキュラムを作成し、小学生に教える講座を実施

◇地域でのプログラミング教育を推進する人的基盤を構築

・目標

◇1億年後の生き物を想像しアイデアを形にする段階でプログラミングを用いて論理的に考え、実際に試行錯誤を繰り返し課題解決型のスキルを身につけることができるようになる

◇ビジュアル言語 (Studuino プログラミング環境) を用いて、プログラミングの基礎的な技能を習得できるようになる

・メンター研修

No.	内容	詳細	時間
1	イントロダクション 実施プログラムを受講	・社会的動向と地域と教育の役割を考え、 実際の講座を体験する	8H
2	プログラムを受講 実施準備	・メンターが実際に児童と同じプログラムを受講する ・全体ふりかえり	8H
3	リハーサル	・メンターが講師となり有志で集まった受講生を対象に リハーサルを行う ・地元小学生の協力の元、実際にシミュレーションを行う	8H
4	機材の準備	・実務を想定した機材の準備、資料の改変、新規サンプル 資料の作成 ・役割分担/シフト確認	8H

【ものづくりのための充実した工具】



【視察・質疑応答の様子】



・授業計画

No.	内容	詳細	時間
1	FAB WALKER の組立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・機構を簡潔に説明し、FAB WALKER が動くしくみについての理解を促す</li> <li>・モーターの動作はプログラミングで制御できることを伝え、次時からの実習への動機づけにする</li> </ul>	1
2	Studuino を用いたプログラミング実習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・FAB WALKER と Studuino プログラミング環境を接続させて動作を確認することにより、プログラミングの結果を実感できるようにする</li> <li>・単純な制御から複雑な制御へと段階を踏みながら指導することにより、プログラミングのしくみを着実に理解・実践できるようにする</li> <li>・モーター、LED、各種センサーなどなるべく多くの部品を制御する方法を示すことにより、各自の作品イメージを具体的に持つことができるようにする</li> </ul>	2
3	FAB WALKER オリジナル作品の制作	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メンターの作例（プログラミングのスキriptも含む）を例示することで、つくりたいロボットのイメージを具体的に持つことができるようにする</li> <li>・「生き物の特徴」「設計図」「インプット／アウトプット」などの項目を書き込めるワークシートを用いて、児童の構想を具体化できるように支援する</li> </ul>	2
4	学習のまとめ ふりかえり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作品発表</li> <li>・自分の作品について簡潔に紹介できるようにスピーチの項目をあらかじめ定めておく</li> </ul>	1

○その他のプログラミング教育に関する取り組み

- ・FAB WALKER にプログラミングで生命を吹き込もう！  
4足歩行ロボット「FAB WALKER」を使ったプログラミング体験ワークショップ。  
創意工夫してミッションを達成するために、脚を選んでプログラミングする。
- ・未来のひみつ道具を作ろう  
アイデアを形にできるIoTブロック「MESH」を用いたワークショップ。  
100均の商品などと組み合わせて、新しい機能をもった道具を作って発表。
- ・micro:bit で光る工作にチャレンジ  
マイコンボードタイプのプログラミング学習用ツール「micro:bit」を使ったものづくりチャレンジ。  
自分の好きな色に光るペンライトを制作。
- ・みんなでKOOVをさわってみよう  
ロボット・プログラミング学習教材「KOOV」でものづくり×プログラミング体験。  
各々のアイデアをブロックで形にして、プログラムで動かしてみる。

- ・テクノロジーサマーキャンプ／めざせ！こどもクリエイター  
プロジェクトマッピング、AR スタンプラリー、電子工芸…など。さまざまなテクノロジー体験を楽しめる、子ども向け学習イベント。
- ・やまぐち子ども未来型学習プロジェクト  
文部科学省による「GIGA スクール構想」に基づく教育現場の ICT 化に伴い、山口市教育委員会、山口情報芸術センター [YCAM]、ファブラボ山口が協働で、地域の教員と共に授業の開発に取り組むプロジェクト。
- ・やまぐち子ども未来型学習プロジェクト  
生徒がフレット・アニメーションを作成・展示するための教材キットを制作。  
タブレット端末を固定して、背面カメラでアニメーション用の素材を撮影。

### ○所感・市への提言

杉山智騎 ファブラボ山口での視察。実際に工房で作業をしている方々もいてファブラボとしての機能が充実していることがうかがえた。人と人との交流の場として大きな意味を持っている場所であると感じた。一番聞きたかった質問「プログラミング教育の意図と学んだ子ども達への期待は？」に対して、「進んでいるデジタル化・デジタル社会の中で原理を理解し、興味を持ってくれたら、その後の発想が変わってくる。基礎知識としてプログラミングを学ぶことで、例えば、冷蔵庫を開けたら電気がつくなどの仕組みを考えることができる。この仕組みを作った人の考えを学ぶことにより、自分が何かを行おうとしたときに、様々なシチュエーションで問題や課題があるとき、プログラミングで解決できるのではないかと思うことで発想の幅が広がる。しかも、自分でできるかもしれないと思ってくれることが大切。自分で何かを作れると思えば、自分で何かを変えようと思える。世の中を変えられるという発想がない人が多い。プログラミングもファブラボも道具にすぎないので、多種多様な道具を使って自分の考えで進んでほしい。」との答えが。まさに、その通りだと感じた。

今回のプログラミング教育は民間のシステム会社が大学生とタッグを組むことで、小学生にわかりやすく授業をしているが専門的な内容も含まれている。総務省の事業が一年で終わって、その後は山口市や山口県が引き継がなかったため、継続的な事業とはならなかったが、新規事業を山口市の教育委員会とすすめている。本市もプログラミング教育は導入しているが、やはり民間のプロが携わることで思考や理念が大幅に向上すると考えられる。専門的な知識や経験と触れさせるという観点からも民間の力を積極的に投入することを強く要望いたします。

近藤敏浩 新たな「ものづくり」を促すにあたって、本市には「ものづくり協議会」がある事は承知している。ただそれは小学生など子どもたちを対象とはしていない。かねてより、豊田市においては「ものづくりサポートセンター」が開かれ、子供たちの自由な発想を手助けしており、ものづくり教育が盛んに行われている。今回視察を行った「ファブラボやまぐち」は全国に数カ所あるファブラボの中でも平成 26 年より小学生に向けたものづくり教育を行っている特徴を持っているところである。子供たちの自由な発想を促す教育は、将来この国において、本市が「ものづくりのまち」であり続けるために必要と考える。

発明倶楽部と言うものがあるそうだが、本市と豊田市を比較した場合、クラブ員の子ども数、そして教育をするサポーターの大人数、特に予算、すべてにおいて、比較にならないほど本市は貧弱だとのこ

とである。ものづくり教育において豊田市に並ぼうと考えた場合、同じことをしては追いつけない。そこで今回ファブラボ山口を視察し、所感と提言をこの報告書に記すことにより、「本市のものづくり教育を飛躍的に向上させたい。」そのような思いから行なった視察の内容に目を通していただき、本市のものづくり教育に少しでも活かしていただけたならば幸いです。

私たちが視察に訪れた日、ファブラボ山口では地元の大学生が3Dプリンタやレーザー加工機などを駆使し、子どもたちに向けたものづくり教育のため、教材の作成に取り組んでいた。ファブラボ山口においては、子供たちのものづくり教育のための人材が育成されていると感じた。

**青山晃子** 施設内は入ると少し独特な匂いがあり、機械が正面に並んだわくわくする空間だった。ものづくりミライ人材成事業のひとつとして立ち上がったため、山口大学や市内教育機関、教育委員会と協働している。大学生がカリキュラムを考え、それを小学生に自分達で教える講座も行われている。大人ではなく大学生から教わるというのは、小学生にとっても身近に感じ、自分の成長の先を想像できる点からも素晴らしい。ファブラボ憲章には目的として「大量生産やマーケットの論理に制約されていた「ものづくり」を解放し、市民ひとりひとりが自ら欲しいものを作り出せるようになる社会が目標である」とされています。学生、こども向けのプログラムだけでなく、市民が誰でも触れることが出来るようマルシェなどの気軽なイベントも開催されている。古い町並みの中にあり、ならびにもおしゃれなお店もある。ここを目的とする人以外もふらっと覗き

やすい立地、雰囲気があるのはよい。本市にも松本町や旧東海道道沿いなど、古い町並みが残っている地域がある。新しい町には持ちようのない財産であり、どう生かすかが大事である。古い町並みと新しい価値観が融合する、若い人を呼び込めるものには行政からも積極的に支援をお願いしたい。

## ファブラボ憲章

**目的** ファブラボとは、3次元プリンタやカッティングマシンなどの工作機械を備えた、誰もが使えるオープンな市民制作工房の世界的なネットワークです。大量生産やマーケットの論理に制約されていた「ものづくり」を解放し、市民ひとりひとりが自ら欲しいものをつくりだせるようになる社会が目標に掲げています。

**利用法** 人を傷つけるものを除けば、(ほぼ)あらゆるものを作ることができます。利用にあたっては、一人一人が自ら試行錯誤して操作法を学び、ラボの使用法や機材利用のノウハウを共有・蓄積・継承していくことが求められます。

**学習** ファブラボでは、実際のプロジェクトを行いながら、自ら機材の使い方を覚え、他のメンバーと互いに教え合い、学び合うことが基本です。また、その試行錯誤の過程をドキュメンテーション(文書化)し、コツやノウハウをまとめたインストラクション(教材)や機材のマニュアルを使用者が共同で作ってあげていくことが求められます。

**ファブラボを利用する人の責任** ・安全 人や周りを怪我させない作業の仕方を覚えること。・掃除 あなたが来た初めの状態よりも、ラボを綺麗に掃除してから帰ること。・維持 ツールや材料のメンテナンスや交換を手伝い、さらにそこで起きた出来事をレポートすること。

**ビジネス** ファブラボでは商業活動(ビジネス・インキュベーション)は可能ですが、オープンなアクセスや情報公開とコンフリクトを起こしてはいけません。ラボの中のみならず、外でも大きく成長し、最終的には、ラボやラボのメンバー、ネットワーク、オリジナルの開発者らにその成果を還元することが期待されます。

## ■視察先：福岡県那珂川市

4月25日（火） 10:00～

～五ヶ山クロス（モンベル五ヶ山ベースキャンプ）について～

- 出席者 【岡崎市】 杉山智騎 近藤敏浩 青山晃子  
【那珂川市】 副議長 江頭大助氏  
経済福祉常任委員会委員長 臂英治氏  
地域づくり課長 鶴田慎也氏  
地域づくり課観光・まちづくり担当係長 高木孝二郎氏  
地域づくり課観光・まちづくり担当 福島祥氏  
議会事務局議会担当係長 大熊拓登氏



### ● 施設の概要について

- 「五ヶ山クロススペース」、「モンベル五ヶ山ベースキャンプ」、「リバーパーク」各施設の総称として「五ヶ山クロス」がある。
- H31年3月「アーバンアウトドアの聖地」をコンセプトに「五ヶ山クロス」がオープン
- 「五ヶ山クロススペース」



五ヶ山クロススペース

- 展望デッキがある五ヶ山クロスの拠点。
  - 美しい湖畔、自然豊かな山々の眺望を楽しむことができる場所。
  - サイクリングの休憩場所や、イベント開催場所として活用。
  - 物販店舗としてモンベル福岡五ヶ山店が入居。
  - 飲食店舗にはカフェ「TRAIL(トレイル)」が入居している。
- ※五ヶ山クロススペースは「ウッドデザイン賞 2019」「福岡美しいまちづくり建築賞優秀賞」「2019年度建築九州賞 JIA 特別

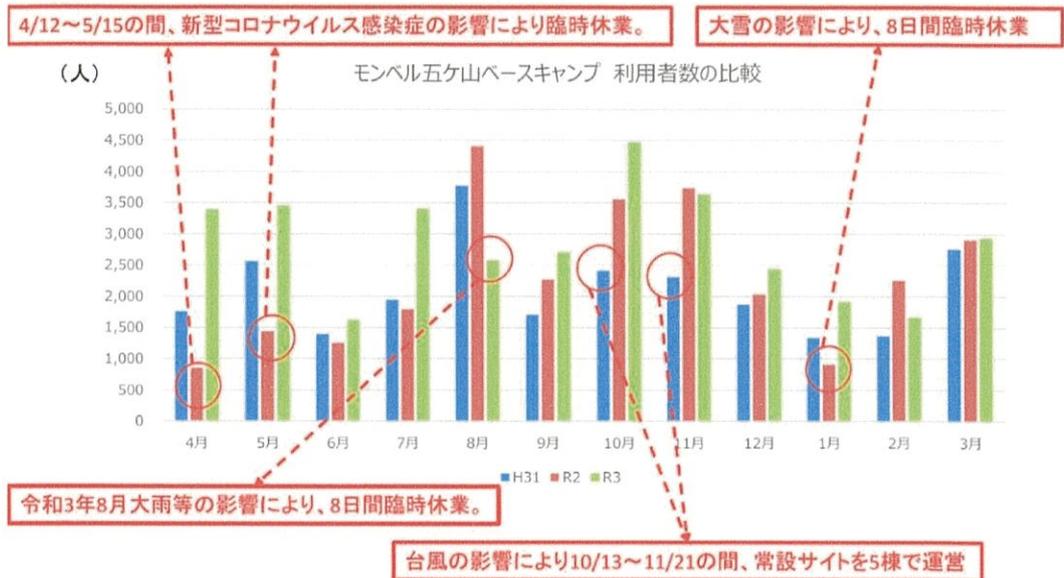
賞」「2020年度グッドデザイン賞」など数々受賞する。

- 「モンベル五ヶ山ベースキャンプ」
  - 五ヶ山クロススペースから約2km。
  - 株式会社モンベルが運営する60区画のキャンプサイト。
  - 必要な道具一式をその場でレンタル可能。
  - 初心者でも気軽にキャンプを楽しむことができる施設。
  - 施設利用状況（令和3年度）
    - 【利用人数】34,207人
    - 【売上額】約8,800万円（レンタル・物販収入は除く）
    - 【稼働率】43.95%
    - 【利用割合】福岡県内91.3%（福岡県内内訳福岡市55%  
福岡地方24% それ以外21%）  
九州内7.7% 九州外1%。  
土曜日の利用は年間を通してほぼ満室。



クライミングピナクル（擬岩）

→モンベル五ヶ山ベースキャンプ来場者月別状況



【モンベル五ヶ山ベースキャンプ来場者数】

■平成31年度・・・25,165人 ■令和2年度・・・27,395人 ■令和3年度・・・34,207人

● 施設の特徴について

福岡都市圏から車で約1時間の距離に位置している。

→都心から短時間で来訪可能で、手軽に安心して山・河川の自然に触れ合える

→福岡県と佐賀県の県境に位置し、国道385号で吉野ヶ里町と結ばれている

コンセプト「アーバンアウトドアの聖地」

→山歩きや地図読み、サイクリング、クライミング、カヤック等、様々なアウトドアアクティビティが楽しめる拠点。(プロによるレクチャー)

● 株式会社モンベルとの包括連携協定の締結について

モンベルとの官民連携の推移

平成28年11月中旬 モンベル本社へ電話

→五ヶ山ダム周辺整備事業について説明

平成29年3月21日 包括連携協定締結

平成29年8月 キャンプ場の変更設計

平成30年4月 モンベルクラブフレンドエリア登録

平成31年2月 キャンプ場の運営業務委託

平成31年3月 テナント(モンベル福岡五ヶ山店)出店

平成31年3月29日 五ヶ山クロスオープン

平成31年4月1日 キャンプ場の指定管理 M.O.C による  
アウトドアイベントがスタート  
(現在も継続して実施)



モンベルは多くの自治体と包括連携協定を結ぶ。

令和4年4月23日 M.O.Cによる五ヶ山ダム湖面での  
カヤック体験がスタート

※M.O.C…モンベル・アウトドア・チャレンジ



モンベルの理念に共感する自治体は多く、ここで掲げた以外にもある。

● 取り組みに対する実績や効果について

モンベルとの連携による実績・効果

- キャンプ場の累計利用者数・・・合計約8万6千人(平成31年度～令和3年度)
- モンベル福岡五ヶ山店の存在→五ヶ山クロスベースにモンベルの直営店があることにより、アウトドアの拠点として認知されやすい施設となった。
- キャンプ場及びモンベル福岡五ヶ山店におけるアウトドアイベントによる集客→アウトドアを熟知しているモンベルが、アクティビティイベントを実施。(プロによるレクチャー)五ヶ山クロスが掲げるコンセプト「アーバンアウトドアの聖地」に合致しており、様々なアウトドアアクティビティが楽しめる拠点としての機能が充実してきている。
- PR力の強化→モンベルが持っている100万人以上の「モンベルクラブ会員」に対する定期的な会報等による五ヶ山クロスのPRが可能に。また、テレビや雑誌等のメディア取材も多く、行政視察も多数受け入れ。
- モンベルが運営することで、アウトドアのノウハウを活用した効果的な管理運営ができています。

● 利用者の声(評価・要望)について



ウォールテントドキャンプサイト

- アウトドアメーカーならではのイベント(クライミング体験等)ができるため、子どもと楽しみに利用している。
- アウトドアを熟知しているモンベルが運営するキャンプ場のため、キャンプに必要な物販が充実している。
- レンタル品が充実している。特にテントやタープはモンベル製品のため、安心して借りることができる。
- フリーサイト以外の全てのサイトに車を横付けできるため、とても便利で使いやすい。

● 現在の課題、今後の展開について

現在の課題

①周遊性の向上

キャンプ場利用前や、利用後に周辺施設に立ち寄ることが少ない状況にある。来訪者にお金を落としてもらう工夫や近隣施設との連携が必要。



## ②キャンプサイト等の維持管理

利用者の満足度を高めるには、キャンプサイト(利用区画)をはじめ、場内の構造物やトイレ等を常にきれいな状態に保たなければならない。そのため、維持管理をこまやかに実施する必要がある。

## ③時代に沿ったニーズへの対応、競合の存在

近年のキャンプブームにより、同業施設が多くオープンしている。そのため、このキャンプ場でしかできない体験を味わってもらう工夫が必要となる。



## ④アウトドアアクティビティのコンテンツ拡充

モンベルが様々なアウトドアアクティビティイベントを実施しているが、土日等の休日の開催がメイン。平日頃から来訪者が楽しめるコンテンツの拡充が必要。

→令和5年度、6年度で「水源地域振興計画策定業務」を実施。本計画でこれらの課題を踏まえた振興策を検討していく。

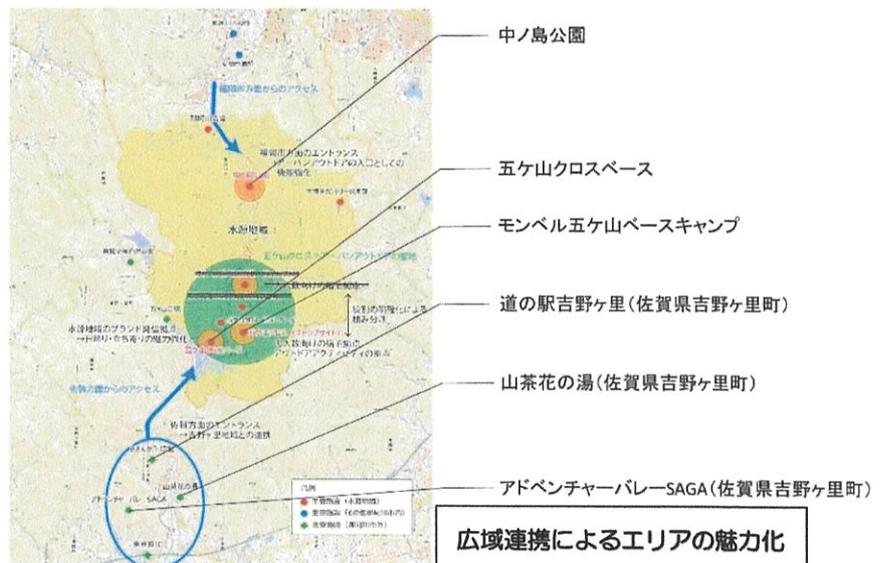
### 今後の展開

#### 五ヶ山ダム湖の湖面活用

カヤック体験等、五ヶ山ダム湖面を活用したイベントを実施

#### 自然環境の活用

自然環境を活用したイベントの開催による集客→五ヶ山周辺の自然環境を活用した、五ヶ山・脊振クロストレイル大会を実施。第3回目



を令和5年3月12日に開催し、毎年開催のイベントとして定着させることを検討している。

【レース詳細】距離:シングル約 32km ダブル約 64km 累積標高:シングル約 2,200m ダブル約 4,400m 制限時間:8時間 エントリー数:293名 スタート数:242名 3-5 自然環境の活用

#### 吉野ヶ里町・周辺事業者との連携による観光人口の流入と循環

アドベンチャーバレーSAGA や山茶花の湯、道の駅など施設利用者の流入、五ヶ山クロスと吉野ヶ里町各施設及び周辺事業者との観光人口の循環→平成31年度に観光振興に関する連携協定を締結。→令和2年3月に「まるっと那珂川・吉野ヶ里」作成→令和4年10月~12月にスイーツスタンプラリーを実施。また、互いのイベントに出展を行い、互いのエリア発信を行っている。

#### 国道385号のバイパス化

年々交通量が増加している那珂川中山間~吉野ヶ里間の道路の新設(バイパス化)が計画されている。

#### 広域連携によるエリアの魅力化

脊振山系等を中心に位置している那珂川市、福岡市早良区、福岡市こども未来局(背振少年自然の家)、

佐賀県吉野ヶ里町の4者で、エリアの活性化を図る。→令和4年3月に地域活性化に向けた連携と協力に関する協定を締結。→令和4年度にはクリスマスマルシェや、星空観察会等を企画・実施。イベントへの相互出展も実施した。連携強化により、情報発信力の強化や更なる魅力向上が期待できる。「来訪客増加」「周遊性向上」「滞在時間延伸」「観光消費額」

● 所感及び市への提言

杉山智騎 驚いたのはモンベルを口説いたこと。職員の努力もあり平成29年にモンベルとの包括連携協定を締結させた。その前に外部委託していたキャンプ場の設計を変更し、業務委託も結んだ。実際に現場を見させてもらったが、素晴らしい景観を活かしたキャンプ場でのびのびと自然を楽しむことができる。五ヶ山クロスベースはダムの大感を感じることができ自然の雄大さを体感できる。オープン以来来場者数はコロナ感染症の影響があったのにも関わらず、年々増加している。来場者数の分析も細かく行っており、行政としても力を入れていることがわかった。今後についても様々な説明をいただいたが、一番注力しないといけないと思ったのは、那珂川市への周遊だと感じた。キャンプへの来訪者は福岡市や福岡地方が大半をしめており、那珂川市へ寄り道をせずに帰宅すると考えられる。温泉地もあるとのことなので、今後の展開が楽しみである。本市にも自然あふれる地域もたくさんあり、有効活用しようと様々な取り組みを行っている最中ではあるが、那珂川市などの大成功している先進事例から転用できるものは、ぜひ生かしていただきたい。

近藤敏浩 岡崎で生まれ50年以上岡崎で暮らしている私ですが、「岡崎とは？」と問われれば、歴史があり、産業があり、自然豊かなまちと答えます。大河ドラマ「どうする家康」が放送されている今年は、特に歴史の奥深さを感じます。ただ、産業は隣接市豊田市に依存し、豊かな自然も額田地区あってのことです。子どもの頃には毎週のように通った額田地区に最近は何ほど訪れていない。自身はともかく市民の方に訪れていただくためにどうしたらよいか。市の西側サイドより早めに進んできている人口減少にどの様に対処すべきなのか。一市民として、一議員として岡崎市の将来ビジョンを頭に描き、岡崎市が持続可能なまちであるために何をすべきか、その答えを自分なりに想定し、視察という形で自らの目で見て、耳で聞き、実際に赴き体験したことを報告書に認(したた)め、行政側に共感していただく。今年1年間の取組目標である「岡崎市の将来ビジョンを描き、岡崎市が持続可能なまちであるために何をすべきか」探しの視察に行って参りました。

この事業のポイントは次の通りで有る。①那珂川市とモンベルが包括連携協定を結び、地域の自然の保全や自然を活用したアウトドア活動による地域振興や健康増進を志向している。アウトドアメーカーとしてのモンベルの理念が地域の自然保全であり、包括連携協定自体、理にかなっている。②那珂川市のダム周辺整備事業において、包括連携協定に基づき

**モンベルと協定の内容**

- (1) 自然体験の促進による環境保全意識の醸成に関する事
- (2) 子どもたちの生き抜いていく力の育成に関する事
- (3) 自然体験の促進による健康増進に関する事
- (4) 防災意識と災害対応力の向上に関する事
- (5) 地域の魅力発信とエコツーリズムの促進による地域経済の活性化に関する事
- (6) 農林水産業の活性化に関する事
- (7) 高齢者、障がい者などの自然体験参加の促進に関する事

モンベルがキャンプ場の修正設計を行い、指定管理者となって運営することで先端的で使い勝手の良いキャンプ場整備が実現している。当初の設計において無かったこと、「下水道の接続」「ドッグラン」「使いやすい炊事場」「電源設備」等はモンベルの設計による物である。また事業資金はダム建設予算から出ている。③那珂川市と福岡県で「五ヶ山ダム湖面利用協定書」を作成し、キャンプ場のアクティビティとしてカヤック体験等の湖水面利用を取り入れた。

「中山間の活用無くして、岡崎に将来は無い。」かつて自身が何を求め額田へ通ったのか、それは、「すぐそこにある豊かな自然」である。近年グランピング場などを備えたおしゃれなキャンプ場がオープンし、市も「わんパーク」などの整備に力を入れる。しかし、額田地区がキャンプ場のメッカとして市民を溢れるほど集めたとは聞いていない。指定管理者の事業報告書を見ると年間利用者が



10,000人を超える施設もあるようだが、9割がデイキャンプの利用である。「額田地区は本市中心部から近く、交通の便が良いので日帰り需要が多い」などとは言わないでいただきたい。五ヶ山クロスも交通の便は良い。また近年、乙川河川敷でキャンプを楽しんでいる市民が多くいる。

本市の行政に携わる方に提言したい。この報告書を読んでいただき、100を大

きく超える自治体と包括協定を結んでいるモンベルと即刻コンタクトを取り、本市額田地区の潜在能力が、秘めたるポテンシャルがどれほどの物であるか、確認してください。

青山晃子 五ヶ山クロスベースは、ダム湖の横に展望デッキとモンベルの物販店、カフェも入っており、サイクリング客に休憩場所として好評とのこと。様々なデザイン賞を受賞しているだけあり、おしゃれな、うきうきする空間だった。少し離れたベースキャンプもモンベルが運営する。60区画、ペットと同伴もでき、キャンプ用品一式まるごと借りることができるため、初心者も安心して利用出来る。コロナ禍で屋外コンテンツであるキャンプが人気だったこともあってか、令和3年度の稼働率は45%近く、土曜日は年間を通してほぼ満室だそうだ。ほかにもアウトドアアクティビティを仕掛けており、モンベル物販店があることで、キャンプ場利用客以外も多くこのエリアを訪れている。ブームに乗ってキャンプ場も増えてきており、新たにダム湖面を活用したカヤック体験なども計画、他との差別化に力を入れている。自然環境を活用したトレイルランの実施や、隣接他市町村との広域連携により相互情報発信などを行っている。本市であれば、東部アウトレットへの流入客を額田地区へ導くことが必要であり、ほかにはない額田らしさの発信、蒲郡や豊川など近隣観光エリアとの連携も必要と考えさせられる。

## ■視察先：熊本県上益城郡益城町

4月26日(水) 10:00~

~益城町復興まちづくりセンターについて~

### 益城町の概要

面積 65.68 km<sup>2</sup>、人口 33,241 人

熊本県の中央北寄りに位置し、県熊本市の東部に接している。町の東部から南部にかけては山が連なる。北部は畑作が盛んな益城台地、中央は平野で稲作が盛んである。空の玄関口「阿蘇くまもと空港」がある。

●施設の概要について  
新庁舎の隣に、2022年にオープン。建設費は3億1,700万円。

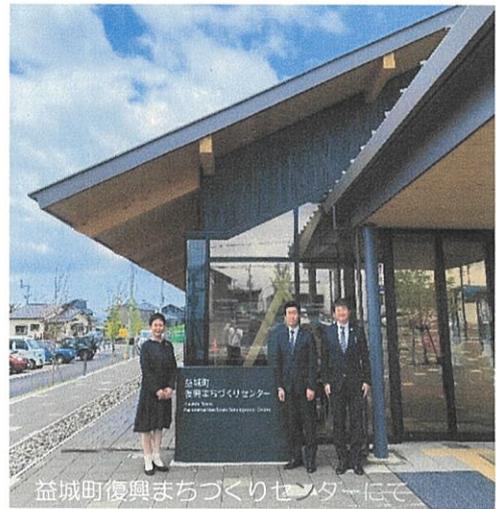
●整備の経緯、背景について

#### 熊本地震による被害

- ▶前震:2016年4月14日  
午後9時26分 震度7
- ▶本震:2016年4月16日  
午前1時25分 震度7

▶この地震により、鉄筋コンクリート3階建ての町役場庁舎が使用不能。公民館等の使用を経て、翌2017年5月から仮庁舎に移転。

▶2023年5月に新庁舎での業務が始まる。



益城町復興まちづくりセンターにて

### ●施設の特長、特色について

#### ① 交流と住民活動の場

- ▶ 県産材が使われ、座卓スペースもあるなどアットホームな雰囲気。
- ▶ バス乗り場が目の前にあり、市民が気軽に集える交流の場を目指す。

#### ② 熊本地震の記憶の伝承の場

- ▶ 「熊本地震震災ミュージアム記憶の回廊」プロジェクトを熊本県、西原市、南阿蘇村、大津市とともに推進。
- ▶ 回廊型フィールドミュージアム。
- ▶ 熊本地震の経験、教訓を確実に後世に伝承させ、防災対応の強化を図る。

### ●防災拠点施設としての機能について

#### ③ 災害に備える場

- ▶ 物資の備蓄所・整備機能の維持に配慮。
- ▶ 災害時の一時避難所、帰宅困難者等の避難施設となる。
- ▶ 平時は防災教育等を行う。

### ●町民の声(評価・要望)について

- ▶ 子育て世代から、雨の日や真夏の暑い日でも子どもと遊べる公園、オープンスペースがほしい。
- ▶ 若年層から、学生が利用するコミュニティスペースがほしい。幅広い世代で使える物を。
- ▶ 被災した痛みと向き合い未来に繋げる場がほしい。

- まちづくり協議会より、まちづくりに関する情報提供や相談が出来る場所に。
- 子どもから高齢者まで楽しめるものに。

● 現在の課題、今後の展開について

現在の課題

- 場を作っても常連さんしか集まらない。敷居が高く見えるから。
- 「協働まちづくり」は大きな取組。成果が解りづらい。

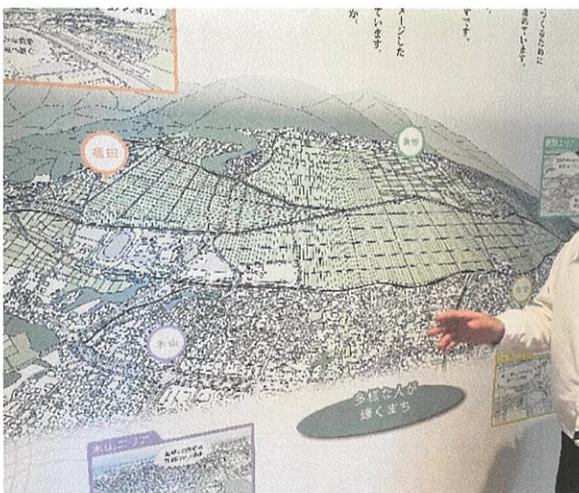
今後の展開

- 地域にあった活動をしながら「まちづくり」を語る場所に。
- 誰もが参加できる活動を多くする（木工教室への関心度の高さに鑑み）。
- 復興まちづくりの実現に向け「気軽に集える」をキーワードにしながら『一緒になって作り上げていく』というわくわく感が生まれる場所に。（復興に向けた共創まちづくりの拠点として）



● 所感及び市への提言

杉山智騎 町役場に隣接した復興まちづくり支援施設。基本方針を“気軽に集える住民活動と交流の場”、“熊本地震の記憶の継承の場”、“災害に備える場”としており、3つとも見事に達成していると感じた。オープンしてから1年で8,400名ほどの来場があったことには正直驚きを隠せなかった。子育て世代を対象とした平日のマルシェなどを開催しているとのことだが、町民から憩いの場としてしっかりと認知されている。復興まちづくりセンター”にじいろ“という名称は公募により決まったとのことだが、「震災のあった2016年を忘れないように2（に）0（じ）1（い）6（ろ）」という思いが伝わってくる。館内の記憶のプロムナードでは震災の記録が細かく、しかも分かりやすく展示されている。震災資料館として価値のあるものであった。復興まちづくり支援施設が町民の集いの場となることで、震災を風化させず、そして、日ごろからの防災意識を高めることもできる。本市でも集いの場に災害のことをわかりやすく展示することで、普段から自分の身は自分でまもる考えが見につくと思われるので、ぜひ導入してほしい。岡崎市は地震ではなく、水害で大きな被害を受けているので、その経験を防災・減災に役立てるべきだと考える。

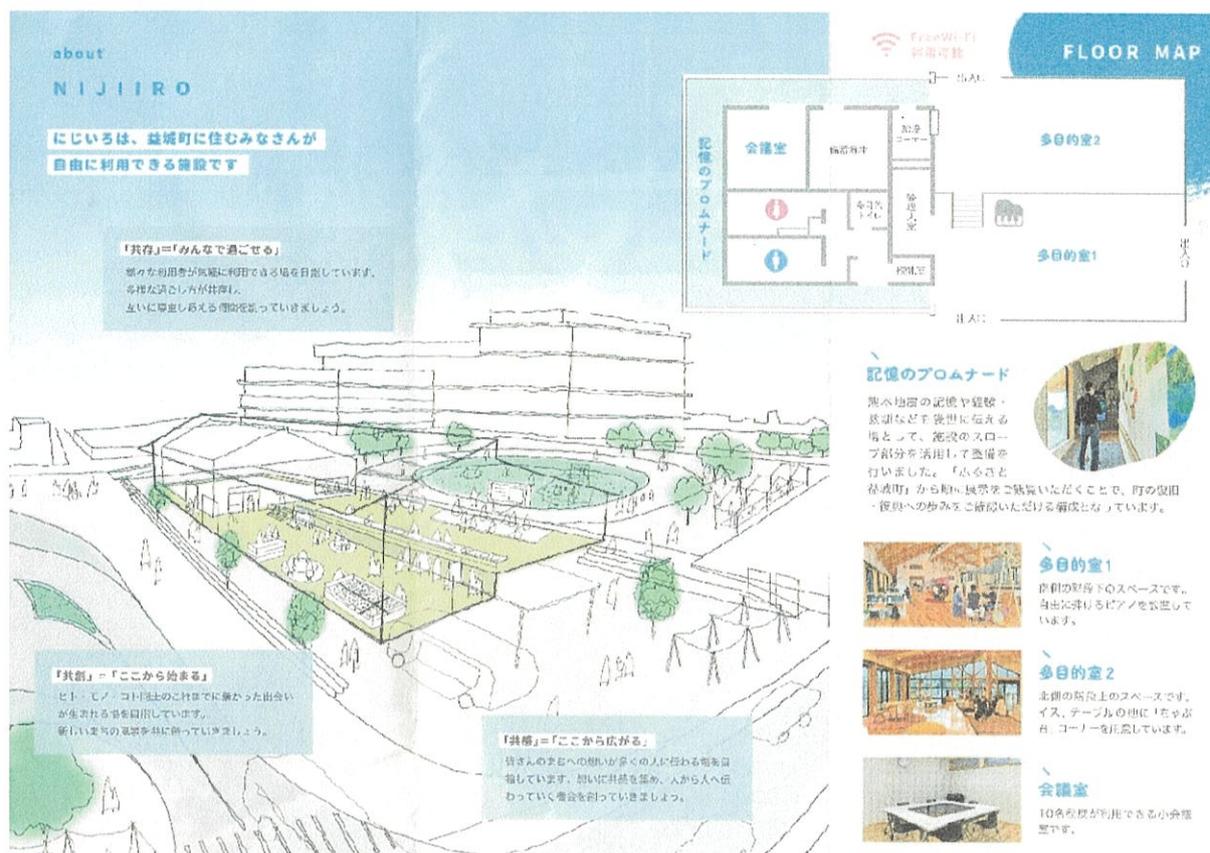


布田川断層帯及び分岐断層帯（天然記念物）の説明

近藤敏浩 熊本市内より路面電車と路線バスを乗り継ぎ益城町復興まちづくりセンターにくる道程、主要路線の拡幅工事の進展、使用されていない仮設住宅群集会所などを見て、震災復興・新しいまちづくりを感じた。

益城町復興まちづくりセンターの基本方針は「気軽に集える住民活動と交流の場」「熊本地震の記憶の継承の場」「災害に備える場」とされていた。現地での説明中も明るくオープンな空間に利用者が集い、打ち合わせをしているところに遭遇した。住民の98

パーセントが被災し、半数の方が避難所を利用したこの町の経験から「災害に備える場」は広く明るくオープンな空間が求められるのであろう。「熊本地震の記憶の継承の場」として、回廊状に展示が成されていた。展示の説明をしてくださった担当者は地震の経験、特に発災後の経験を語り継ぐことは、次に被災された方々の命を救う活動だと思っていると語る。また、当方が自治体関係者であることもあってか、発災後の町職員の苦闘を時折涙ぐみながら話してくれた。以下説明の内容を記した。文中太字にしたところは私が自分なりに重要と感じたところである。



益城町の地質は阿蘇の噴火による火山灰土で保水力がなく、一旦豪雨に見舞われると表土を流し、崖を崩し道路を決壊させる。そのことから災害対策は台風など降水第一であった。しかし、町を東西に貫く形状で、布田川断層帯及び分岐断層帯（天然記念物に指定）が存在しており、マグニチュード7クラス、震度6強以上の地震が想定されていた。ただこれら断層に起因したとされる地震は西暦744年（天平16年）の肥後地震以来なく、住民の中の地震に対する警戒感希薄で、備えは二の次であったとのことだ。益城町は熊本市のベッドタウンとしての性格を有しており、益城町西部を中心として、熊本地震発生までの人口は増加傾向にあった。しかし、地震発生後は町外への人口流出が起り地震発生前と比べて減少している。前震は2016年4月14日午後9時26分震度7、本震が同月16日午前1時25分震度7と、短期間に大型の地震が起こった。いずれも夜間であり暗闇の中の震度7の地震がいかに町民に恐怖と被害を与えたか想像に難くない。4月16日の本震発生当時、加えて余震も続いていたことから、それに伴い、避難者が急増した。4月16日夜から17日朝にかけて、10か所の指定避難所施設内及び指定避難所駐車場に避難した人は約16,000人であった。自宅庭先や公園、自治公民館等に避難した人もいて、避難者の全容把握は困難であったが、町民のほとんどが自宅外に避難していたと推測される。4月18日以降、避難者数は減少傾向

にあった。しかし避難所は過密状態にあり、解消へ向けた取り組みや、要配慮者等へのきめ細かなケアが課題となった。集団生活に不向きな要配慮者等を中心に、トレーラーハウス やユニットハウスを提供した。さらに介護が必要な方等を支援するため、町内外 20 数箇所の福祉施設を福祉避難所に指定した。役所機能復旧に努めた。前震発生（4月14日）から本震発生（4月16日）までの間に職員が動員された業務としては、「避難所での避難者対応に関する業務」が最も多く、全職員が投入した業務時間の 29.2パーセントに該当する。次いで「物資の輸送、供給対策」（12.9%）が多く「平常業務」は機能を失った。また地震発生以降の町職員の勤務状況を見ると、4月中は65.9%の職員が休みを取れなかった。「休みはなかった」と答えた職員は、5月30.0%、6月13.5%、7月6.3%、8月以降になってようやく3%以下となった。しかし「通常と同じ」と答えた



職員は、4月は1.4%、5月は7.1%となっており、半数を超えるのは9月以降である。長期にわたって町職員に業務負荷の大きい状況が続いていたことが分かる。なかにはその状況に耐えかね命を落とした職員もいたとのことであった。

家族全員が無事であった職員は92.6%であった。一方で、犠牲になった家族・怪我をした家族がいる職員や自分自身が怪我をした職員もあり、直ちに業務につけなかった。85.2%の職員は自

宅に被害を受け、その内18.4%の職員の自宅が全壊であった。発災後の出勤元について、自動車（車中泊）から出勤した経験がある職員は24.4%、実家や親類・知人宅から出勤した経験のある職員は15.0%、震災前とは別のアパートや家を借り、そこから出勤した職員は8.9%となっており、震災前の自宅から出勤していた職員は64.8%であった。16日未明の本震発生時には、自宅にいた職員と、勤務場所にいた職員とが、それぞれ42.3%であった。本震によって怪我をした職員は5.1%、身の危険があった職員は69.2%であった。このように、多くの職員が自分自

復興まちづくりセンター



身・家族や自宅に何らかの被害を受けた中で、業務に、主には地震への対応であるが、当たっていた。

熊本地震では、町内の家屋等のうち約98%が被害に見舞われる等、ほとんどの町民に被害が及んだ。そのような中、自分自身や家族を支える「自助」や、地域コミュニティや民間のつな

がりの力で互いに支え合う「共助」により、自発的に緊急時の助け合いがなされた事例が数多く確認された。

ペット同伴避難者向けに、国際協力NGOピースウィンズ・ジャパン等がペット同伴で避難できるユニットハウスを運営した。

この視察に当たり、益城町が取り組んだ「応急対応についての検証報告書」を拝読した。その上で被災された経験を持ち、復興まちづくりに携わっている方のお話を伺ったのだが、資料を読んだだけでは深く感じる事の出来なかった本物の経験にふれることができたと思う。

作成した視察報告書を「次の災害対応」に活かし、本市の防災体制の充実を図るとともに、防災力の向上に役立てていただければ幸いです。



復興まちづくりセンター横バスのロータリー

青山晃子 市役所隣接で横はバスのロータリーとなっている。夜 10 時まで開けることで高校生の学校帰りの学習利用などもある。日中の利用層は幅広い。オープンスペースは市役所職員等も打合せに使っている。座卓もあり、乳幼児親子も使いやすい。中二階のような段差があり、下部は倉庫になっているが、落下防止などの安全策もとられている。発災後、分断されたコミュニティを元に戻すため、様々なイベントを企画したが、いつも同じ人、町民

ではなく一回り外の人が集まることが多く、復興まちづくりの難しさを感じたとのこと。イベントの提供をするのではなく、いかに巻き込みながら、一緒に担い手になってもらうかが重要であり、難しいことだと教わった。本市も想定される被害規模からいえば、コミュニティごとの仮設住宅移行は難しく、地域コミュニティは分断されることが予想される。地元を離れ人間関係が薄れると地元愛も薄れ地元へ戻ろうという意識も薄れる。戻りたくても戻れない人だけでなく、戻らなくてもいいかという層を生んでしまう。被害想定は難しく悩ましい問題だが、復興期のテーマとして本市も意識しておく必要がある。



防災ニュース掲示板